



## 審査員特別賞

リリー・フランキー賞

イギリス生まれ、

日本育ちのスーダン人

ハリッド ハッサン

ぼくの名前は、ハリッドハッサン。明らかに日本人の名前ではない。そう、確かにぼくの両親は日本人ではない。でも、ぼくの国籍は日本だし、生後一週間ごろのころから十四歳のいままでずっと日本にくらしている。ではぼくは日本人？それはぼくにはわからない。生まれたところはイギリス（正確にはイギリス領北アイルランド）。ではぼくはイギリス人？それもぼくにはわからない。ぼくの両親はスーダン人。アフリカ北東部、エジプトの真南に位置する国。ではぼくはスーダン人？それも

ぼくにはわからない。ただひとつわかるのは、ぼくが地球人だということだ。

さきほど述べた通り、ぼくの両親はアフリカのスーダン出身。それで、ぼくも黒人で、みんなよりも肌の色が濃い。ぼくにとっての「はだいろ」は、うすだいいろのことじゃなくて、うすちやいろのこと。髪の毛も、パーマがかかったようにもじゃもじゃ。だから、まちを歩いているとほかの人よりも目立って、よく話しかけられて、こう聞かれる。

「なに人ですか？」

ぼくはこう答える。

「スーダン人です。」

確かにぼくの国籍は日本だけど、相手は国籍のことを聞いている訳じゃないだろうから。

またこう聞かれることもある。

「どこ出身ですか？」

この質問は答えるのがちょっと難しい。生まれた場所はイギリスだけど、そう伝えたらイギリス人だと思われる

しまう。だから、ぼくはこう答える。

「イギリス生まれのスーダン人です。」

人に聞かれたとき、ぼくは自分がスーダン人だと伝えるし、周りの人から見てもぼくはスーダン人。でも、ぼくはスーダンの公用語のアラビア語も日本語ほどしゃべれないし、読み書きも日本ほどできない。現にいま、ぼくは日本語でこの作文を書いている。本当にぼくはスーダン人なのだろうか。ぼくは日本人なのだろうか。ぼくは、まだ自分がなに人なのか、わからない。

今年の夏、ぼくは家族といっしょにスーダンに帰省した。この旅は、ぼくにとっては自分がなに人かを発見するための旅になるだろうと期待に胸を膨らませて出発した。

スーダンとは全然違った。みんなぼくと同じ。みんな肌が濃い。まちなかで視線を感じることもないし、とくに話しかけられない。やっぱりぼくはスーダン人なのか。でもそれは、やっぱり表面上のことだけ、外見のことだけなのかもしれない。ぼくの心は、スーダ

ン人なのか、それとも日本人なのか。

ずっと日本でくらしているのに、スーダンのことはそんなに知っている訳ではない。スーダンの文化も、歴史も、国民性も、常識も、考え方も、ちょっとしか知らない。ぼくが知っているのは、ほとんどが日本のことだ。だから、スーダンのことを日本人の感覚でとらえていた。例えば、スーダンでフードコートに行ったときのこと。食べ終わった後にトレイをなおしに行ったのですが、他の客がゴミとトレイをテーブルの上に残していたので、ぼくは、非常識な人だな、と思っていました。しかし、ぼくがテーブルにもどると、いっしょにきていたいところが、

「ハッサンって、日本人になっちゃったの？」と笑っていた。ほかにも、災害もおきていないのにしょっちゅう停電になることや、まれに水道水に土砂が混ざっていることも、ぼくにとってはおかしいが、むこうのひとにとってはおかしくない。スーダンでは、親戚になんども、

「ハッサンって、日本人になっちゃったの？」と笑いながら言われた。やっぱりぼくは中身だけ日本人なのかな。でもスーダンの好きなどころもある。スーダンの人はお人好しな人が多く、みんなとてもやさしい。そして、みんなユーモアのセンスがあって、とてもおもしろい人たちだ。やっぱりぼくはスーダン人なのかなあ。

結局ぼくは自分がなに人なのか、答えを見つけれずに帰国した。でも、まったく収穫がなかったわけではない。ぼくには、日本人な部分と、スーダン人な部分がある。そのふたつでぼくは構成されている。そのお互いのいいところを取り入れていって、さらにいい人間を目指していききたいという、目標を得ることができた。